

ユダヤ人・女性・詩人  
エルゼ・ラスカー＝シューラーの手紙

名古屋大学国際言語文化研究科 山口庸子

0 はじめに

I エルゼ・ラスカー＝シューラーの生涯

年譜参照。多ジャンルでの芸術活動、国際性、人間関係の豊かさ。

II ラスカー＝シューラーのイメージ

1 奇人・変人としてのラスカー＝シューラー

- \* ゴットフリート・ベン「ラスカー＝シューラーに捧ぐ」(1952)  
市民／芸術家、正常／異常、ドイツ／ユダヤ
- \* ヘルマ・ザンダース＝ブラームス『ゴットフリート・ベンとエルゼ・ラスカー＝シューラー ギーゼルヘールとユスフ王子』(1997)
- \* 論文集『モダニズムにおけるユダヤ文化と女性性』(1994)



2 エキゾチックで情熱的な「ユダヤ人女性」

- \* ペーター・ヒレ「エルゼ・ラスカー＝シューラー」(1904)  
「ユダヤの女流詩人 die jüdische Dichterin」  
エキゾチック、情熱的、女性的、原初的、闇・黒



3 ナチスによる迫害・亡命

- \* 『フェルキッシャー・ベオバハター（民族の監視者）』紙  
「ベドウィン族酋長の娘、クライスト賞を受賞！」(1932)

補足資料 アモス・ギタイの映画『ベルリン エルサレム』(1989)

市民／芸術家、正常／異常、ユダヤ／ドイツ、光／闇、自然／都会、新生／没落

- \* 最初の場面 ターニャ／エルゼ ユスフの扮装 「ダビデとヨナタン」の引用
- \* 焚書する人々
- \* 亡命後のラスカー＝シューラー「私の青いピアノ」花嫁姿との対比

III 書簡体小説『ノルウェーへの手紙』(1911 - 1912)

- 1 イメージとの戯れ
- 2 「作者」概念の変容 様々な「わたし」
- 3 「読者」から「共演者 Mitspieler」へ
- 4 遊戯＝芝居＝演技としての Spiel



## エルゼ・ラスカー＝シューラー年譜

- 1869年 2月11日 エルバーフェルトの同化ユダヤ人家庭に生まれる。  
『フランクフルト新聞』の創立者レーオポルト・ゾンネマンの親戚。
- 1882年 兄パウルの死。
- 1890年 母の死。
- 1894年 医師ベルトルト・ラスカーと結婚。ベルリンへ移住。画家ジムゾン・ゴルトベルクに師事
- 1897年 父の死。
- 1899年 詩人ペーター・ヒレを知る。 息子パウル誕生。
- 1900年 「新しい共同体」に参加。 ゲオルク・レーヴィーン（ヘルヴァルト・ヴァルデン）を知る。
- 1901年 文化的シオニズムの雑誌『東と西』に詩「ズラミート」を発表。  
第一詩集『冥府の河』出版。
- 1903年 ラスカーと離婚。ヴァルデンと再婚。
- 1907年 散文『バグダッドのティーノの夜な夜な』出版。
- 1909年 戯曲『ヴッパー河』出版。
- 1910年 ヴァルデン、表現主義の雑誌『嵐（Der Sturm）』創刊。
- 1911年 小説『ノルウェーへの手紙』『嵐』に連載。（1912年2月まで）
- 1912年 ゴットフリート・ベン、フランツ・マルクを知る。ウィーンで朗読会。  
詩集『ヘブライのバラード』出版。ヴァルデンと離婚。ベンと恋愛関係。
- 1913年 ブラハで朗読会。モスクワ、サンクト・ペテルブルクに旅行。
- 1914年 ゲオルク・トラークルを知る。小説『テーベの王子』出版。
- 1915年 ベルリンのオットー・ハース＝ハイエ画廊で挿絵の展覧会。
- 1916年 フォルクヴァング美術館で挿絵の展覧会。
- 1917年 スイス滞在。ベルンとチューリヒで朗読会。
- 1921年 小説『バルセロナの奇跡のラビ』出版。ドイツ各地、ウィーン、ブラハで朗読会。
- 1927年 息子パウルの死。
- 1928年 アムステルダム、ハーグで朗読会。パリへ旅行。
- 1929年 以後、ドイツ各地のラジオ放送で朗読。
- 1932年 リヒャルト・ピリンガーと共にクライスト賞受賞。
- 1933年 1月、ヒトラー政権掌握。4月、チューリヒに亡命。5月、焚書。
- 1934年 アレクサンドリアへ旅行。7週間エルサレムに滞在。
- 1937年 エッセイ集『ヘブライ人の国』をチューリヒで出版。  
2ヶ月エルサレムに滞在。
- 1938年 ドイツ市民権剥奪。
- 1939年 ロンドンで挿絵の展覧会。テルアビブとエルサレムへ向け出港。  
スイス再入国拒否。
- 1941年 エルサレムで、朗読サークル『クラール』を設立。  
戯曲『わたしとわたし』の朗読。  
ヘルヴァルト・ヴァルデン、ソ連で獄死。
- 1943年 詩集『わたしの青いピアノ』をエルサレムで出版。
- 1945年 1月22日 エルサレムで死去。

<引用> (下線はすべて引用者による)

「これが、かつてドイツに存在したなかで、最も偉大な女性詩人だったのである。[...]彼女のテーマは何重にもユダヤ的であり、彼女のファンタジーはオリエンティックであった。しかし、彼女の言語はドイツ語だったのであり、豊饒で絢爛として、しなやかなドイツ語、成熟し甘美で、どのような言い回しにおいても、創造的なものの核から芽吹いたものばかりであるようなドイツ語であった。」( Benn, Gottfried: Rede auf Else Lasker-Schüler. In: Gesammelte Werke in vier Bänden Herausgegeben von Dieter Wellershoff. Wiesbaden 1959, Bd.1, S. 538. )

「彼女は小さく、当時は少年のように細身で、真っ黒な髪を短髪にしていたが、その髪型はその頃にはまだ珍しかった。彼女は、身をかわすような不可解な眼差しの、大きな、鴉のように黒いよく動く眼をしていた。当時であれその後であれ、彼女と出歩けば必ず、あたりは静まり返り、皆が彼女の姿を眼で追うことを覚悟しなければならなかった。彼女は奇抜な幅広のスカートやズボンを履き、眼を剥くような上着を着ていた。首や腕には、どきつい紛い物の装飾品や、鎖や、イヤリングがじゃらじゃらしていた。[...]彼女の食事は決まって不規則で、非常に小食で、しばしば胡桃と果物で一週間をすごした。彼女はしばしばベンチの上で寝て、いつでもどこでも常に貧しかった。これがテーベの王子、ユスフ、バグダッドのティーノ、黒鳥だったのである。」( Benn: a.a.O., S. 537-538. )

「エルゼ・ラスカー＝シューラーは、ユダヤの女流詩人である。名手である。デボラのごとく。[...]イスラエルの黒鳥、世界が引き裂かれてしまったサフオーである。子供のように輝き、原初の闇のように暗い。彼女の黒い髪は夜のように、冬の雪が舞っている。彼女の両頬は、精神によって焼き尽くされた、すばらしい果実なのだ。」( Hille, Peter: Else Lasker-Schüler. In: Peter Hille. Der Bohemien von Schlachtensee. Herausgegeben von Günter Albrecht. Berlin 1994, S. 253. )

ズラミート

おお、あなたの甘い口で  
わたしは ありあまる幸せを知りました！  
もう 大天使ガブリエルの唇が、  
わたしの心臓の上で燃えるのを感じています...  
そして夜の雲が  
わたしの深い香柏の夢を飲む。  
おお、あなたの生がわたしを招く！  
そしてわたしは滅びる  
咲きほこる心臓の痛みとともに、  
そして 宇宙に吹き散る、  
時間の、  
永遠のなかに、  
そしてわたしの魂は燃えつきる  
エルサレムの夕映えのなかに。

( Lasker-Schüler, Else: WB 1.1, S. 48 )

わたしの青いピアノ

わたしの家には 青いピアノがある  
けれど わたしは楽譜を知らない。  
それは地下室の扉の闇にある、  
世界が 野蛮になって以来。  
星の手が 連弾で弾いている  
月の乙女が 小船で歌っていた  
今は ネズミたちが ガチャガチャ踊っている。  
鍵盤は 壊れてしまった...  
わたしは 亡き青い女を悼む。  
ああ 愛しい天使らよ わたしに開いてよ  
わたしは 苦いパンを食べたのだから  
生きながら 天の扉を  
たとえ 禁にそむこうとも。

( A.a.O., S. 284-285. )

「愛しい使節らよ。そなたらがベルリンへ帰還するとき、壁に刻まれたわがレリーフの除幕式に臨むため、私はおそらくテーベに立ち戻っているであろう。とは言え私は、わが姿を目にすることを楽しみにしてはおらぬ。なぜなら私は、彫刻にも、絵画にも、塑像にさえ、わが身を再び認めることはないからだ。私はわが肖像画のうちに、入れ代わる昼と夜の遊戯、眠りと覚醒の遊戯を探しているのだから。」(『ノルウェーへの手紙』 Lasker-Schüler, Else: WB 3.1., S. 261)

「人生を、画 = 舞台群像のごとく生きんことを。私はいつも<sup>イメージ</sup>絵画の中にいます。[...]つまり私は絵画の中から人生を眺めているのです。どっちをまじめに考えているかって？どっちもです。私は人生において死に、<sup>イメージ</sup>絵画のなかで息を吹き返すのです。ノルウェーへの手紙』 A.a.O., S. 232)

「けれどもまた私は詩人であり、バグダットのティーノであるばかりではなく、テーベの王子であるばかりでもなく、ついにはエジプトのユスフとして存在したばかりでもなく、そうではなく私はまた、初めて一人の紳士に連れられてケンピンスキーのレストランで夕食をご馳走になり、キャビアや紅葉李を添えた鴨の味を覚え、エスカルゴの貝殻から覗くカタツムリにびっくり仰天するような、本当に何も知らない女の子でもありうるわけです。」(『ノルウェーへの手紙』 A.a.O., S. 192-193)

「まだおわかりにならないのですか。私のノルウェーへの手紙は、群衆喜劇 Massenlustspiel なのですよ。」(『ノルウェーへの手紙』 A.a.O., S. 213.)

「ダライ = ラマのおおせられるには、モデルの何人かは、わが芸術への登場を望んでいないとのこと。大臣閣下のお言葉は、そうとしか解釈できません。けれども、問題は私がモデルをどのように表現しているかではないのです。私はこれから先も彼らと関わりは持ちません。」(『ノルウェーへの手紙』 A.a.O., S. 216.)

「大臣閣下 (...) 何にしても私は、みなに衣装を着せて、お芝居 Spiel をしたいと恋焦がれる私自身の思いを愛しているのですよ。 (...) 演技 Spielenこそすべてです。誰よりも魅力溢れる貴殿には、どうか私が引き続きプレーするゲーム Spiele spielenをお楽しみいただきたく願っております。 (...) あなたのテーベの王子ユスフ (エルゼ・L シューラー)」(カール・クラウス宛の手紙 Lasker-Schüler: WB 6, S. 209.)

「ところで、せめてダライ = ラマのモチーフが『嵐』から消え失せるように、あなたから働きかけてはもらえないだろうか。私はこの榮譽には、ほとほとうんざりしているのだが。前々号および前号の『ノルウェーへの手紙』が、全く並外れて見事な出来だただけになおのこと、私としてはそう願いたい。」(カール・クラウスから、ヘルヴァルト・ヴァルデン宛の手紙 George C. Avery (Hrsg.): Feinde in Scharen. Ein wahres Vergnügen dazusein. Karl Kraus – Herwarth Walden. Briefwechsel 1909-1912. Göttingen 2002, S. 400.)

「愛するヘルヴァルト、『嵐』に発表してちょうだい。私たちの仲良しカフェのメンバーで、あなたたち宛ての手紙に登場するのはもう御免だと思われる方はお知らせくださいって。自由に退場させてあげるつもりよ。」(『ノルウェーへの手紙』 Lasker-Schüler: WB 3.1, S. 216)

「いくら私が絵画の内部で生きているといっても、私は絵画そのものだと言っても、あなたの眼に映る私の色鮮やかさが失われてきていることには、もうずっと心を痛めています。私たちの眼からはもうお互いの姿がほとんど失われてしまったのですね、ヘルヴァルト。周りの人たちは私たちをもう一度添わせようというつもりで、実のところ油で汚したりテレピン油で洗ったりしているだけです。私たちを化粧直ししようというのですよ、あの人たちは。本物の色彩の上に、偽物の無理な色彩を塗りつけようというのです。歪曲です！キッチュな復活というものです！」(『ノルウェーへの手紙』 Lasker-Schüler: WB 3.1, S.233)

## ダビデとヨナタン

わたしたちは聖書に書き留められている  
色鮮やかに入り乱れて。

けれど、この男子の遊びは、  
星のあいだで生きつづける。

わたしはダビデ、  
あなたはわたしの遊び友だち。

おお、わたしたちは赤く染めた  
牡牛の白い心臓を。

祭日の空のもと  
愛の詩篇の膨らむ蕾のように。

あなたの別れの眼差しが  
あなたはいつも、静かな口づけで別れを告げる。

あなたの心臓に何ができよう  
わたしの心臓なしに、

あなたの甘い夜は  
わたしの歌もなしに。



( Lasker-Schüler, Else: WB 1.1, S. 120-121 )

### 参考文献 (抜粋)

Bauschinger, Sigird: Else Lasker-Schüler. Ihr Werk und Ihre Zeit. Heidelberg 1980.

Franz Marc-Else Lasker-Schüler: „Der Blaue Reiter präsentiert Eurer Hoheit sein Blaues Pferd. Karten und Briefe. Herausgegeben und kommentiert Peter-Klaus Schuster. München 1987.

Klüsener, Erika/Pfäfflin, Friedrich: Else Lasker-Schüler. 1869-1945. Marbach am Neckar 1995.

Lasker-Schüler, Else: Werke und Briefe. Kritische Ausgabe. Im Auftrag des Franz Rosenzweig-Zentrums der Hebräischen Universität Jerusalem, der Bergischen Universität Wuppertal und des Deutschen Literaturarchivs Marbach am Neckar. Herausgegeben von Norbert Oellers, Heinz Rölleke und Itta Schedletzky. Frankfurt am Main 1996ff.

松下たえ子 『評伝 エルゼ・ラスカー＝シューラー 表現主義を超えたユダヤ系ドイツ詩人』  
慶應大学出版会 2007年

山口庸子 『踊る身体 of 詩学 モデルネの舞踊表象』 名古屋大学出版会 2006年

同 「複製技術時代のユダヤ人・女性・詩人 エルゼ・ラスカー＝シューラーのイメージ戦略」  
『ナマール』(ユダヤ文化研究会) 11号 (印刷中)